

農作物技術情報 第2号 花き

発行日 令和5年 4月20日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当(電話 0197-68-4435)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ りんどう 株仕立て、追肥、雑草対策の作業を適期に進めましょう。
圃場が乾燥する場合は、灌水を実施しましょう。
- ◆ 小ぎく 育苗、定植、摘心作業を計画的に進めましょう。

りんどう

1 生育状況

3月以降平年よりもかなり気温が高く推移したことで、萌芽期や展葉期は平年より早くなっています。北上市では、早生種、晩生種とも平年より7日程度早く、3月下旬に展葉期となりました。展葉後の生育も進んでおり、株仕立て作業が始まっています。

2 圃場管理

(1) 灌水

これから圃場が乾燥しやすい時期となります。5、6月は特に草丈の伸長が旺盛な時期ですので、乾燥しないよう注意します。通路(畝間)灌水が基本となります。

(2) 支柱・ネット張り

株仕立て前に支柱やネットの補修や補強を行い、ネットの張り具合を調節しておきます。ネットは3段張りを標準としますが、草丈が伸びる品種は4段張りとするなど品種特性に合わせ調節します。

(3) 株仕立て

株仕立ては、切花品質の確保や病虫害防除の点から重要な作業です。生育の良好な茎を株当たり8~10本程度残して他の茎は除去しますが、残す茎の数は草勢に応じて加減します。

盆需要期向けの品種では、株仕立て本数を12~16本程度に増やすことで収量が増加します。仕立て本数が増えることで、茎が細く、花段数が減少し、下位規格が多くなりますが、下位規格の需要が高い盆需要期に出荷となるため、収量、収益の増加が見込まれます。

除去する茎は、作業がしやすい株の外側部分だけではなく、内側からも除去します。作業が遅れないよう茎の伸長の早い品種から順次開始し、草丈が30cm頃までにすべて終わるようにします。

また、ウイルス病の伝染を防ぐため、刃物は使わずに手で折り取ります。間引いた茎葉は、病虫害の発生予防のため、必ず圃場外へ持ち出して処分します。

(4) 追肥

基肥+追肥体系で施肥した場合(基肥:りんどう専用肥料等)は、追肥は以下により行います。

ア 追肥時期

追肥時期は品種の生育状況に合わせて調節し、側芽が見える頃を目安に終わるようにします。



株仕立て後の株(矢印:間引きした茎)
※株全体からバランスよく間引きする

イ 追肥量

追肥には窒素・カリ成分が主体の速効性肥料を使用し、施肥量は窒素成分量で5～8kg/10aを基準とします。これを2～3回に分けて施用しますが、例年より葉色が濃い場合は、1回の追肥量を減らすか追肥回数を減らします。

(5) 雑草対策

防草シートを積極的に活用し、手除草や機械除草をできるだけ減らします。シートは様々な種類がありますが、圃場の排水性を考慮して、できるだけ透水性の高いものを使用します。

また、りんどうに適用のある除草剤を、茎葉処理剤と土壌処理剤を区分して活用し、除草労力の軽減化を図ります。



防草シートの使用例

(6) 生理障害対策

葉先枯れ症状は、生育が盛んになる5月上旬頃から発生し、おおよそ7月下旬頃までみられます。原因は、急激な茎葉伸長に伴う植物体の水分不足と、植物体上部の石灰不足によるものとされています。よって、圃場を乾燥させない土壌水分管理が重要です。

また、生育初期からの定期的な石灰資材の葉面散布により、発生の軽減効果が期待できます。



葉先枯れ症状

3 病虫害防除

リンドウホソハマキの幼虫は、前年の残茎の中で越冬しますので、早めに除去して圃場外へ持ち出して処分します。

生育初期の防除で重要なのは、葉枯病とハダニ類です。いずれも、生育初期に多発すると、その後全体に拡大して防除が困難となるので初期防除を徹底します。

特に、前年にハダニ類が発生した圃場では、残茎の中などで越冬した成虫の数が多くなるため、本年も発生しやすくなります。葉裏をよく観察して発生状況を確認し、発生初期に薬剤防除を行います。ダニ剤は、同系薬剤の使用を年一回とし、散布ムラがないよう葉の表裏に十分量を散布します。



残茎内のリンドウホソハマキ越冬幼虫

4 施設栽培

促成・半促成栽培ともに、花芽分化期（側芽発生期が目安）までは最低気温8～10℃を目標に夜温を確保します。以降、最低気温が10℃を上回るようになったら、夜間入り口とサイドを徐々に開放し、茎の軟弱化を防ぎます。

日中の温度管理は25℃以下を目標とします。30℃を超えるような状況が続くと、露地の真夏と同じ状態になり、開花遅延の原因となるため、晴天時の換気には特に留意します。

病虫害では、リンドウホソハマキやハダニ類の発生時期になっています。圃場をよく観察し、発生初期に薬剤防除します。

5 育苗

りんどうは移植時の植え傷みの影響を受けやすいので、移植作業は遅くとも根がセル底に到達する前に終わります。ピンセットで苗を引き抜く際は、茎葉を傷つけないよう、根を切らないよう優しく取り扱います。間引き・移植作業後、本葉が見え始めたら、液肥による追肥を開始します。苗の生育状態をよく観察し、適期に施用を始めます。

育苗期に発生しやすい病気として、アルタナリア菌による苗腐敗症が挙げられます。本葉2対目が出始める時期に有効薬剤を散布して予防に努めます。

小ぎく

1 生育状況

8月咲き品種の親株の生育は概ね順調で、挿し芽時期は平年並みとなり、4月下旬から定植作業が始まる見込みです。9月咲き品種の親株は、摘心後、気温が高く経過したことから生育が早まっています。病虫害では、白さび病、べと病、アザミウマ類の発生が見られています。

2 親株管理

9月咲品種の挿し芽時期は、5月上旬以降が一般的です。親株の生育が進んでいる場合は、軟弱な生育や側枝の伸びすぎを避けるため、日中はハウスのサイドと入口を開放して適温管理を心がけます。また、過かん水を避けて軟弱徒長を抑制します。

親株の生育が早まり、定植までに穂や苗の老化が心配される場合は、挿し穂の冷蔵が有効です。採取した穂を調製し、発根剤を粉衣した状態で、揃え束ねてビニル袋等に入れ、2～3℃で20日程度貯蔵可能です。

3 育苗

育苗期間中は、15℃を目標に温度管理します。夜間はトンネルなどで保温しますが、低温期は保温のみで目標温度を確保するのが困難なため、暖房機や温床線を活用します。ただし、日中は20℃を越えないよう施設やトンネルを開放して換気します。

例年この時期は、晴天時のトンネルの開け遅れによる高温障害や、逆に過度の遮光を原因とする日照不足による発根遅れがみられますので、天候や苗の生育に応じたきめ細やかな管理が必要です。

なお、適切な条件で育苗した場合、挿し芽から概ね2週間で定植適期苗となります。



4 圃場準備

小ぎくは過湿による生育への影響が大きく、排水不良となりやすい水田転換畑などで栽培する場合は、明きよ、暗きよなどの排水対策を講じます。また、高畦栽培も有効です。



排水不良地で発生した欠株
(写真手前中央部ほど水が溜まりやすかったため、被害程度が大きい)

5 定植

定植期は地域によって多少異なりますが、8月咲品種は4月下旬から5月上旬、9月咲品種は5月下旬から6月上旬が定植期となります。老化していない適期苗の定植が基本となりますが、定植直後に降霜が予想される場合は、天候が回復するまで定植を控えます。

定植作業は、極端な浅植えや深植えとならないようにし、植え込み後は苗が浮き上がらないよう軽く土で苗を押さえます。

定植後は、十分に灌水して活着や初期生育を促します。

6 定植後の管理

(1) 晩霜対策

5月中旬頃までは晩霜の心配があります。特に晩霜の多い地域では、ポリフィルムや不織布被覆による対策を行います。いずれも、風で飛ばされないようしっかりと固定します。



(2) 灌水

定植後に土壌の水分が不足すると、根の発育が抑えられて生育が停滞します。圃場が乾燥しないよう適宜灌水を行います。

(3) 摘心

摘心は、定植後に活着を確認してから芽の先端部を小さく摘み取ります（ソフトピンチ）。作業後は圃場を何度か確認し、摘心のやり残しや不完全な摘心がないようにします。

また、省力化を目的として、定植前にセルトレイ上で摘心する方法や、定植後に本葉4、5枚を残して先端部を通常より大きく摘み取る方法（ハードピンチ）もあります。いずれの方法とも、側枝の発生数が少なくなる場合がありますので、側枝の発生が弱い品種では、慣行の定植後のソフトピンチとします。



ソフトピンチの例
(左：摘み取り部位、右：摘心直後の状態)



ハードピンチの例
(丸印：摘み取り部位)

(4) 土寄せ

無マルチ栽培では、側枝が10cm前後に伸びた頃と整枝後の2回、土寄せを実施します。

土寄せによって、新根の発生が促されて生育が旺盛となり、切花のボリュームが確保されます。併せて、通路の雑草抑制にも有効です。

7 病害虫防除

病害では、白さび病やべと病の防除が重要です。親株から感染した苗を圃場に持ち込んで発生することが多いので、生育初期からの定期的な薬剤の予防散布を徹底します。

害虫では、アブラムシ類やハモグリバエ類が、苗からの持ち込みによって定植直後から発生することがあるので、初期防除に留意します。

共通

1 肥料コスト低減に向けて

肥料・燃油価格の高騰が進む昨今ですが、必要な資材までも安易に使用を控えると収量や品質に悪影響を与えてしまいます。このため、肥料については、土壌診断に基づく適正施肥、たい肥等有機物の活用、施肥量低減技術の導入、肥料銘柄の見直しや調達方式の改善等によりコスト低減に努めます。

岩手県では、肥料コスト低減に向けて下記のマニュアルを発行し、岩手県ホームページに掲載しています。是非一度、お手持ちのパソコンやスマートフォンから確認してください。

岩手県肥料コスト低減対策マニュアル（令和4年1月）

https://www.pref.iwate.jp/res/projects/default_project/page/001/049/686/hiryokoutoumanyuaru0406.pdf

春の農作業安全月間 [4月15日
~6月15日]
「農作業 慣れと油断が 事故のもと」

山火事防止運動月間 [3月1日
~5月31日]
「火の確認 山を愛する あなたのマナー」

岩手県では例年3～5月に、野山が乾燥し、野焼きが原因と思われる林野火災が多発しています。やむを得ず野焼きを行う場合は、消防署に届け出たうえで、火の取り扱いに十分注意しましょう。

次号は5月25日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。